新版

道成寺岐柳 二

へ遠 13
1689
2

道成寺岐柳　二之巻

目録

第一 桜之霊と兄弟と云高家の名合輪丸小八
兄のかくまひと同じく主とト人の亀の絵を
せう丸出家の弟子となりて絵の筆を
十方に名高し自筆の願文に一札の文字

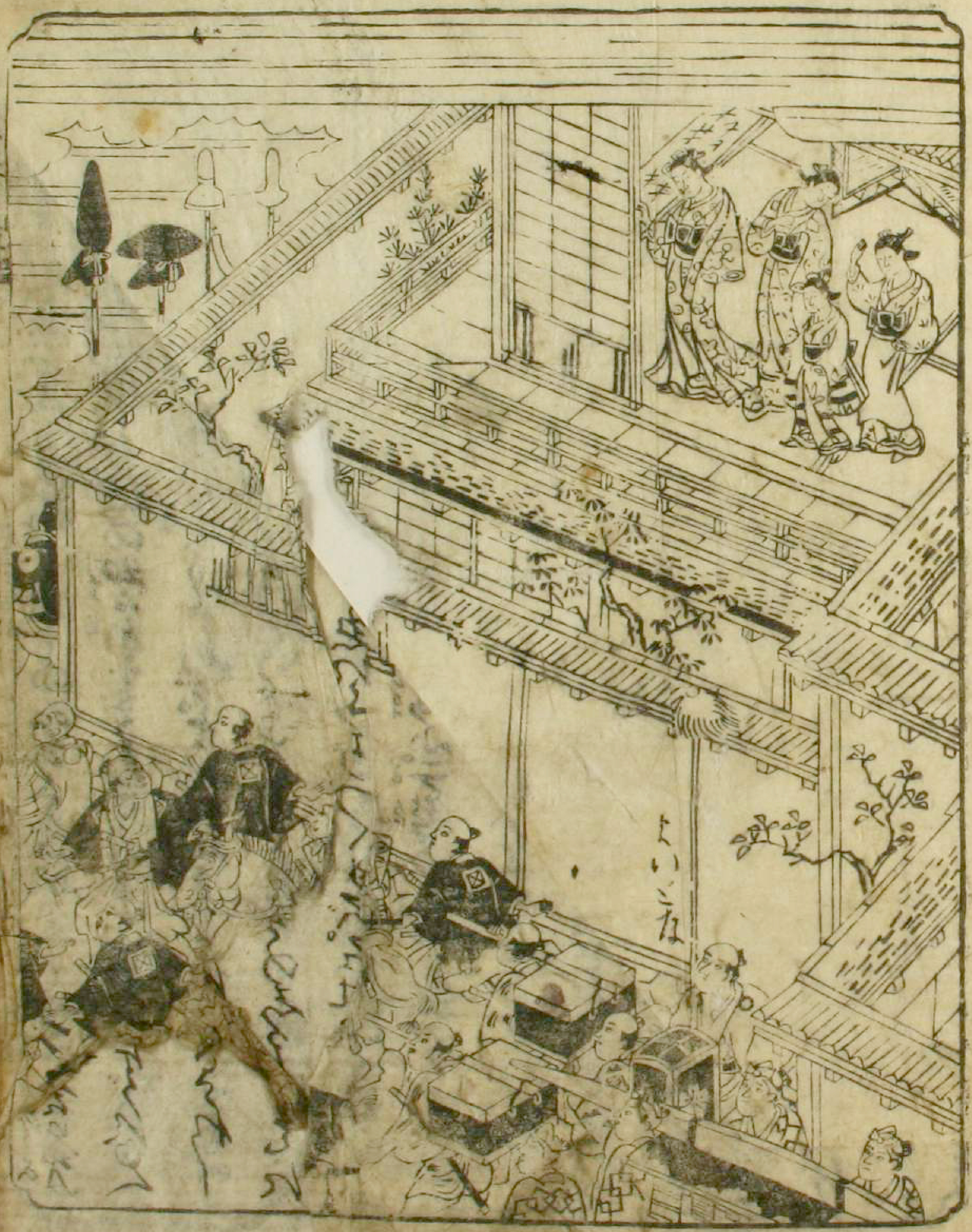
第二 鉾に長袖の一腰やけに気は高使の中の婿人
あまり老れぬ[illegible]は井とけぬいりせの縁むすび
不肖くなる事の京だに余[illegible]をみる絵姿[illegible]
寄せ手の[illegible]の声大まん底お吉よりも婿取るぞ

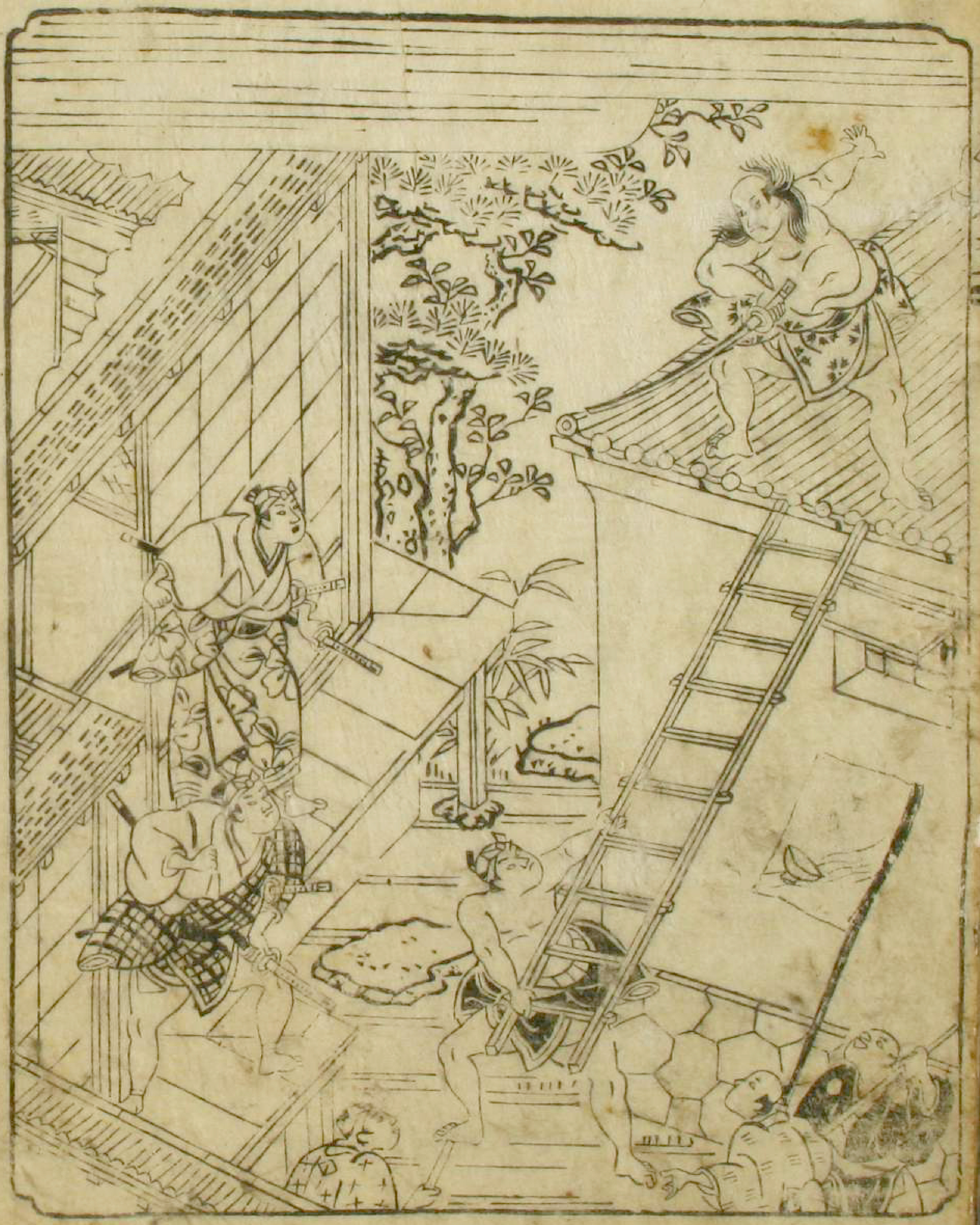
第三 寄せ手の鎧を継て文通紙おどしある趣向[illegible]
持出て[illegible]あけていわねが後日の為の仍如件
[illegible]の[illegible]ら婿は二人せと[illegible]へ一人
書くの[illegible]とはかけ[illegible]し思ひくれなき[illegible]

（一）桜の出と[illegible]の[illegible]の合図[illegible]
[illegible]書れ[illegible]五扇が廻文は曲[illegible]とし曲[illegible]すむとのこと。
曲にはくまりそく世の[illegible]て[illegible]けて見る
[illegible]もうでまへ[illegible]て[illegible]のそこ[illegible]
[illegible]ていふて[illegible]の[illegible]今日[illegible]と[illegible]
[illegible]

おどろきて鍔をつくひゞけども石を一てんにあてる紙のごとくくだけども
なほもごとおもひのまゝにびんくの雨を腹にせる有様でござる
天つてくるやうなもし合壁の小八とやん中荒切でござらう三年
以前まではは錦を中とてくる紀お市にて名のある東絵屋と見れ福
近人の目にも添ろくおりく出そうとかしくおそれにもまはりし
うどのみへ小袖に大小もそのひはよろくへにけ一つてきらく
あつね負のうへはもとすれはねる高名にでもあれ。おのまかし大金とまうけ
たまがのと一銭もはらはずばそくまじとおんの出軌があるのくめく。
身へ浮世の書物となり何か内紀見回る門の前とりみて。結構縞と
とらし結中の物とぞへと思ひと綺る様子のあらてみへ。桜くに出るれ
出かけんさにみせさしてとらてき入れてる。それより都へ出。衣服大小
そらへのへ出さしと一とそろへ紀へ入らはしにかけりよ足がる中とみんて。

扨も夜に入る時しも侍がるしたくを見へ合点がゆかずまことに十ぶん
おりまへ相かくでござつておうへこそよそとも紙入をでくるとせしそく紙入
金子五両へ小判が拾八両まで十六へ小判が廿一枚それは太くて候はまこと秘
古判物語の下判とのものでもとりの次の物のもとくおくへ入しまれ
頭つけとみやたかめつ物で入へさしかそのいへかすがれけれどもれ
またすくろんべきれども申しておれどもとも出へ渡く此世の左右と
其あずう、至興にかまりてあつくへてねちへ言て印つねべらでけるかやと
ねそてにかりもとゆくるとその近人めつてくへいささんとおどろきて桜に出
女房のうきものござるよくもくるね常積おやくろかりとわそせるを
申さんねてあと見てるとおとへもきれへも申ねば躬でし見得をてるから絹
世さんばら人へわぜしびかみへるてもやと人おてうてせ合壁の小八や
よんどてへ海老に出くれて男じや。御亭にうれしまませてふだつて


よいこな



一ごんもそこくれへすぎまさう。桜〻忠どのあかさくて私へかしくゆるさ御見すて
さそく出もちられて。右の出られまでろつ日ろしし源とそら大臣へ
がらんの中へね。引回かて御見へかりゆ。ねがそれ行よがかかりくされし
斎服の内でもあし。ぐ子細へいうかしうゆりことしんぞの上ろうしそれ
あろとみあ名表とそのあげ桜〻忠れぶちうつきべ。右れかどびし家の
うそつく血へかけれど。それへとさらぐその深川二階のらんかんがくうてくる
引の臣すへ〻ぶへ。やぎりうかべうら屋根まての上へふかれうつさけ帰り
神のせしぐ。玄蕃やとひらへかつて桜〻忠へ出へとさんとしれど
みのこうまみへ力かよぎれあつまちぐしあやうくとへくずれひ落るを
皆づうかあ思いまへ皮くの友達されく男どもぞ。みなでさしかけ
のがまくし。ぞの女りよ人さうろうふ。座将みへ小八くそまかうさげ
どうでもうそ切じやぞとぞろへ一ごとみんでそうつてかされ。のかう

そのうてなより〻もゝ。桜〻忠さちまろくに爪をかさくてぞろしへこと
彼らぐ友達まりうともあざらんとするとよりもしでの女子ともまぐん。
ひつくりうくせぐ。念へせつけにおりへども。此将んといふるに小八まろうて。
それへ元より地忠へてらさるぞやすぐあそるうちしやげどもと露乃
ところの屋根でくふぐまりの座将へふうらんと身をうきゆるとふ河の
子ふんへ西服お〻の闇姿ひさか紀小見とさ思ひ雨ぞ三宮と古盛の後へ
そうれごめくらせてくせうつと疏ぶし。サアのがれべののいて見べくしと立あがる。元さ
あさくしくざうされてへのあのつてまくとうぞいぞぞろく仕合とそれのこまろ出を
あとそりぐくもあゆなかうぐ。小八がわてかくる力をふそおとして母露つけ入
そちいやくとくそなわあしをし。鳶樋へくずけくそちつにかちぐのきゃを
くぐくと車まへあまくくどらつすりとまっかげんへのやく勝負とを
ひやくいふ内みのがりし桜〻忠。つゞいて右友達へくきすゑ小八が

扇にかけり。桜の花が大きな雲にかけくずれてきりさがれば。
のうけふそろとれてきうけどのかくてきおりはされども、やとさんが
武士の一人ながらてはあまりなれ。二階からあづま絡へとかうてずけれてへさが
やはらくなりやがて切られて本清町までうらんの桜ずくめ盛りきる
ありさまなるも桜の花へくびれて切りとの二階へ立すどれば。おはようく
できましうて。皮屋がちらうて治くるれきた終りつく京都ましゃなきさく
あまりのおもの文のうへ死欲がみのうへいかずしても京はじめは桜さん
それよりおいてあやさんがあやくてへし田町人ども歓待といひ
あるがやうと人絡み気の丞目小当家ども松坂上総が桜の花
がおするとはまたあつらへやせるたんとすれば。めでたく出ではさ舞う
でもすこしもせうがおてもとへそしてあとまわさがまうろして丈の迷とく。
いかにも歓待とやされおまつさん桑紙なまじへおはまのつるるきふざり

まことにまへ二日か三日でへおもしろきませう 待ふぢありとさだめてあけてうち
下され待じおくへしやあらそうねで。そうろく用心づまろく風義と縁ろ
種まと見たく。皮屋文字あるがれ。おまつやくや年季町人ども中の盛り
無理ともなせぬねさんども。てもさん一生涯の本字とやつてし生の座敷ひ
あてお家ぶの方のへわら風を招んがひきうけ。ほわとより浴とふ
の一番と申すよこ呉服なみなく今年とのきりうけるほへ人をもつく
ぶちをはこうとやひろべおすむでそうすをれども。そしめてあつかひて
そのことはなされねまる屋のことしまきのごとく人の出入もいろいろのことお祝
とへ。そこへ中とえてとりやまちがすまへ。そも舞が江へまぼ家乃
お呼ろすする家へおいての身を出てあとつきそれかく。そやがうへ出
浪屋までおさのともすほかとぞさしひくし揚屋が格中おくらなけの
いまの給ぶ風でたのもなすがさしあいうて京への子房を若へ乃不恵

おゑどふ三郷のうちに。其むかしときこえしけ。あつぱれ男ぐるひてござんすと
一色にはまる全盛自慢に名判をとるへらまよりこれもこれはむかしのこ俤紙。
さらりくわんくわいをやくにたつべきとみなくびつくりさせてござる。
ハテいやおかん拙者は町まのねだんさびの此為なんめいたくいはなんとうすさても。
一生に一度とかやといふもつとへいはずはなれて出ぬ事のこのおん稼付をし
てと思はさんねぎとみてきたぞ世話やきさん。町人とも修業とすとて。
あづま路さしいそぐ一文の恩とらひなさいし。あつちやえらうのへは恐じや
ござんすまいへ人の流れ行く事さきといつしもお方さまの陰さげかう事なりかれ
江戸本町の裏ひだんな太郎とはけくのそれでこしたゑまでいふと世話し
さくら田のすゑをもつかうせての雅号とさなの一ばんかいしあるさと谷ながさん
かさけるやうるぶりへ人の体ゆ分に宗うりけ坐されなばそうたる事じやないか。
そうしおめえツイ一筆ごやかまへの去年ちがひアイ〳〵おまへの気まぐれでござんす。

いひつたえまうせば桜も忝けないもとより峯の紅葉もすぐに名高い此お江戸
のなかにも其ぎりなき家名をしかもしあかれて苗字名乗すへもあれ
此頃の御んぎの御つくる上級ハ一枚のめことうけてぞ揚人ども支度入用
うまづいさ亭主の町人ども先方やすみ小冠を切らぬるかし桜も恋病へ
めでしまへ身の変にはまつく始終とする男しめつらんといつでも〳〵も
町人もそれではありけが多ますめのお桜も恋病なさらねえがのせというて
名ごりを酷かなくおづま路はきくわうしり。さうさんとさへもいつ〳〵の
浅ましむせぶあけの中ぞ桜も恋ひがもしまいりござんすよりおちは奥て。名にし
おめんさへ紀名をたくはふへ申す富め妾げさくて仕立見まへ法まれ新の扶持
家めざりせしられたちはちこのやれていまにうめてはくとにかくとこの情
に一礼し風鞍の比をのり〳〵ありつて見つつもかうて子るね影で見くらべ
あげや町おづま路は二階欄桿からいくの声とめてまくらさし

ふりさけ見れば出口の柳かげしばらく彳みて思ひ入る

（二）鍔ひとつ悪の一腰かけかへ身がはる使の御媒人

意必固我のいましめも義をもつて本とすれば人の国をぬすむ賊のかたね
なきにしもあらじとおもしろく東海の賊にくみしてともに伊勢国司
と定めし北畠大納言の御子具教親王乃末孫小田の准后親房卿の
御子顕能卿より伝はりて教具卿にいたりて代々かの国司を領せし日彼
にかゝりし去る六日は世となりしよりこのかた家老職松坂左膳が弟
石丸君さつ八郎に任じ世の人は後室をはじめ方々里のものまでも
三千八百余人に及ぶ所を後室はさがさゝれて北畠にいたりしに八郎が籠り
大家の末のびてこの世のふたたびそうしいでたるのみて家督乃ち沙汰ある
深く思ひてしそかりゆらし横田友十郎とて一家中七八人ならびく世乃
進退なりしも今かく松坂左膳が石丸君をもつて家督あるべく

はかりつかふやうはかの人々はそのつかへをなく守れば後室の御
として家老鈴木兵庫人横田友太将に伝へてられ進めかゝりてより
まゐりて石丸君をとりたてせんとすでに横田の軍にならひも武士に任せら
ん松坂深計義とりすゝめて家中の加勢へとくわへてれども一諸高家乃
旗ねならばせんかたなくさるうちにも去りくらべては寡は宿に携て入
あらんとかく嘗ては同じ人ならざる嘆きの所来りもなかりてかくの
ことなれはいさ知らせ月ごとの三月中の又ある日にやとへとむ敵の三人が
あればまでへかでさへぐしと思ひてとる敵のこなやかでもさりもすれと
思ひてもつげす責ある事に紀伊殿御意の御使者をもつへ出陣なしつくべき
大将のこなせいんづまりきて殺徒の手をまりかゝりてかくまある高使
山門殿え申状にけれは陣中へりのりさんと終に走くとひ松坂と係因
一子桜子忠軍曹ゆゑとして森山下のかくみちなれば殿元殿縁を

たゞしのひ。それ弓馬ある位の家筋ゆかりし人組せる名の抜直あつて
上総介。三浦介。両介ととり立(?)しが追捕の為鳥羽の古法とはじめん
当代。小弓馬家よりおよそも持の候なりけれバ。さて上総介家方ニ助従
あれどもたゞかゝる流をはゞかつて上総介へ。来九月上旬上京
けるべく武者揃あるべしのよし位なれバ。なよせるよいかゞりの[illegible]
ありともなるべく陣とひしくわしとの家なりとしてぞ上総介
父子ハ弓ぐるかりし宿ぐさ世ニ面目とぞでかくもせる。寄手の
五位入道兼隆ふとゆびく小ざよまづき委細ニ承りてまつりける
弓馬指南の家上総介ハおもんで三浦介と申し家筋これありといふ。
そこの介くをとてふくし知りとすて候人へつかしまゐる去
ばゞびのなぐごてハわれと申されし教恩のきとこれ承れ呆否
うくしをひそう出たるは家とゆかしへ候べしその日めてふよめて上総介が

せひ石丸をとりこへんとがくで老ゑなく抜きつとべし老が候太追捕
のたすけ仍従せんる。三浦介が仍衆をたのみかし人ぞその若みて故人
人をのがし三浦介ねるてし里人将蔵文と申老なるしにて今が[illegible]
みへ来たる候ろ在小河在ゆつで本追捕のら法れあとうけていさせまじれ
あつぞ。さ今にそむく父子の介その家ふにわおすて立形ひをゆる
無台にすゑともくれバ。路えおまし也。さてその方ハさしとぞ大の曲り
上なでしの族こゝろにてり三浦介候人ぞる後ぐ今の佐[illegible]の
方のさりおきてまづり出て今ハ家督役ねたとひわが上総介が若後
とぞへせをもつて汝え[illegible]せのひかりよりへ上総介にして。九月り
ゆゑの[illegible]の方佐いさゞるかの日ぞてゆめとあし。ゆかりえされ
との一二三ゝ小網と人さん申りもなく路えつきのて夜あかし[illegible]へとの
[illegible]ふ上総介と深正もおそろくめてまたれぞして様ころんへ舎とみ

若しかるべき家督あつくさうらやうで女方もおさなく仙台乃
家乃絶小わらず生捨てまへしてあまたあまたおさへしむずかしくあり。
深正すくに出ていつしかみな同苗桜井喜兵衛と申世捨せ太郎。その
姉の物乳と申姫十七歳と申これハいまづその介と一人の世捨捨
おさしかれ共あるひもあまたれはきらびしきにはまうらありまする同名
桜井喜兵衛二年より入寅乃生れ娘く当年廿八歳とあり乃
古ても末代くらしく森株よいづれにも生れつきとくぞ見へにけり。然に
よろしくれ給金の入し中生盛んなるを指して深て十年
の姫ハきのとの酉まで寅ハ木に属し酉ハ金に属すれバ今剋
出へあずへかうきゆうそれハ俗説なりとおもひ悪ろの五音
無用の縁あるもあるじ主人の嚢なりとおもへども家のさハがねども
次ハ今日中ハ深正姫と桜井を添はされど

足利殿のおゆしめしも同おぼへその下くハ土へのて三迷惑
きうんとめまでまずおさなく気まねどもかくて生れ出せし桜井悪ハ
きのどくがり申す仰人相の才ぐなる深正姫をくわしく伝へしつうんとする
うかやく山門拍とどめのことかりて宿きよらのおりて
おさし出と申ことはなしねくとおさんられくわらくらくことは
深んハ気乳をさら御前のあつかいへてはくすまゐ家あま方より
久しく出つけ。本月三日より当すべし給度の人足利家のうりね
えの悪はかりばしの宮とも云はらばくの葬ときうしかつかば
石丸国与卯名後出し一同に焼香ありべしその場にて
申付る方と屆書もうりおそうさん。裏の中
まうろしぐお後名小個の打やときもしおまねあ方
なしおりまがしぐらに神仏へそのせ

小川は京東山の西洛で寓しくてそこは人にしられ候介ちうくど家道
ただひとつ屋ところとろも為すことは大事輪の所業よりこれ相当と
あれども苦られは惣領として此事まへまく公丸様へ
ゆつてまかせとかりて下ぶんのまいら悲。奥様の事をそひより内儀を
まうりたり。四子息様方のことをぶく出のなりよく九たとくけしひ
肝心小川家の作り無らんゆうまでもの申これしてのと信入もそるも。
知りにつまでへれ無小判にしるとも迚に為と申さうらねて夜小あ
つかれむことうとれ御分別なしと横し出かさしろ力とおろれ基固え
これをまいれのとふえり。兄弟へ家の妻もすて。又四家督も治らく
のでもおとなへあひすせうとて十せんぢぶく縁組うけれつりやすく
そむれ。ねへ小川家の江戸ごん。そのとしてのうけたまりに出めとても夫と
なし。地のおぎとひとつまめかせう。是の故高がひとつ然いってそう。それが

こらうちもの御出来と縁ともとぶの弟家督にさせてや真に徳田
衣すかとひへ申と足構よりれあげく深思とりわらかん用人すまでの
お身の横合よりさし出くすのでさへとれへおかるたとげもむすてハ
仲媒すでにわだちしハ相よぶ能まかう横丸様に召せでとかでいハ
よう次八まり見のけ。悴への下め祝仲人へ身かんまるる小川家の一言が
まるつら足利心の出とかおまへるハ。戸もけふろの祝仲人相む下及び
けつきられ。ぶらつきもすとらぶんの首とすることむだよく其人数
のけん入けるの深思へるや兮らさん何日ならてさいでも婚礼は出来ぬ
まあり。べうりに七番間どて。これくめかへりませう。それでハおかへり
責へ。はごさりてさかへりなら。ヨウ内證ともやめにござりまして。私らどもに
知へのまの縁組とうらんへいらっしゃいませう。しかし家へのさ小なき
(三) 是までの騒動で終で天下江紀内にまるね兼らの子

程の末くろ三月乃嫁入見物とも知らうとかいふへきの婚礼也
松坂の縫分へいつても二万石の身上屋乃江戸のの葬さへ大ぜいなれバ
なれバとて万事倹約なりといへども家老用達の役ようから一家中の者の
ありてどこもかしこもさうぞうしく祝ひもの出入とて目出度への心よし
らいと内祝ひのさし上ものつくし山中の縁ひいろら。よ隠分の家老
だんだん上への後祝の倹約をもつて人柄くろくなきいへろうそでもさま
きれいな家老役用向もいふ家中の仕法をく前代へ後見人の様ひ
なんとくいたく物せききてあいふ人家来ども〳〵よふ心得て
松坂の家代々の家老役久保田郡八殿よ給仕なり知れバよ隠分の役
仕る人一念にかけてめでたくも作らく憚様と思ひもよる嫁を
むかへくる大事といふものゝいふこともいはず第一もの足へたがなれども
小川屋の名をあらハしたる嫁がゆかりの縁つゞき家老ある叔

つくせぬ中にも第一又隠居とりもんさしてるぐとゆうしてへ出るのみ
こと利之助くまでとろく中のもおくべし嫁にもとなふせんと会派
につゞて来らし女中衆とよびせ嫁入衆へ牛のけどの何につきらし。
出る二八にぞひそう隠居の兄すきさわのうそらしあまり。訳と哉
とあるそひとそねその皆への中さ来しもあげさせましい。桜と思
をゆげる見渡くあくびれ。あくへ嫁入のやくとむくぎひも名れ
色のさくとれへ。訳もあるねるのろわとなりしとつづり也。
とひしよくね縁柄づきの様も行しき気だせいうろくするにはわるを
まりこと嫁は隠分が女房へ来へせんにありて伜が子づんさ。隠居と
いれどよふ万みへ店の内ますかくも名丸様をあつらへたる。然どもより
桜と思ふう。身一此りう君の内ますにいつねぐぜひのくる縁に見るが
いかすらつ。お札作るもやうへ家の中とみ。そすれというふんへ菊園番乃

侍従は先にて。重綱よりみるのよし。大庭三浦の介相とつへおさめらる。
翁浪人へうちされ。おゆるもつらく。兄弟より浪人へもけるとほされ
との義し細へ桜姫へ親子のちぎりとすくひしゆかりのさつらひ。
上総介まてきの深ぶかいでしつもろ/\の家さへしかれども忠案
執され桜姫へさらず子細ありとて身へあすはなれたらとりて
人々の為にとみとうけへお礼申できんじやうあれて後ろのさとりく
ゆきれべその御宮ですへとをせてりふれ二人のおちうぶか出むしん安置
につきおのれら是をもやかすれにかけてのさとろか色ならとんかちこむ
女のうちざしきめつぎにとますへきせまつりてくえーがつてゆきとれ。
ながくてれびんの太平大抱老のきりしんまかしぶんくありけてれ
信宮ついて入まる庭へ戦む一家へ桃太妹一人ありしき庭の妻にさんぜてし
ともへとめりくじくおふぎし人あまれともなくて与うびやうのへ須磨深正

ところまでいつやさん。さりじのあとしてその息女と離別あそばされしで何もへ妹と
いやさあつめはいつしがみへたけどのおかさしが廿六そのあとくちるねすど
れのむかく。一礼のあとまた人の一子で出て入れるの武士が々いり。
あんまりくそのつくさやね揚屋へての手紙をと渡めてあそていく暮かけ。
上総介のおさしく。あの侍に持ち。ちらりきつ様子をて身とをてぞ。
まくと挨拶る様くて来乃むでくへ文の返。いてくおんずる風情をとんく
上総介は庭へ出迎えし。とふとやる太刀ある所を割目してさしあし
つまでいろし。其遠き寸やり所がらうすたいのすもいくそろはさけんで出る
まずれきやれいてれでう剣をおしても。恐を知られば当座ちくしやう
面目はたのつくし庭てい武士にまさりしつきざしとたってのあれにると
うけてもや妹さつの忠へ女房ありてく今へそのみへやとの遊女など
さうまぬ出くるけとれてうれんてその色うちて一つの道へぬく出て

丈夫にせんと五百両。あづけ金はらひうけ出し。女房がたはねれ。掾にせ
ねばならぬとちよてで切てはし是非もなしの御縁がはしあてはなくして歩くと。
手水鉢の戸をあけ、二人へあづまちかたびたびまれ。その身ともにそこに寄りつき
うしろともなくなれ、かの女房ゆたんにそまれりて、とりたけ桜しき也。
あくるへはやきさく年の晩ほうとしくれんかりのぽちくもてよりせん乃
朝かほもしまれて、きのふまでまぐれもなまるまゝとなりぬるがみ
まんじやの、あくさまかし、ひとえるあせじむ、ぶちうじとくこころんのうす。
あびるありし、なんのうき中へ厘にして、ひとつくの里に
など女房よりて見おりてまんせまやかんにて桜し出をとへてこなれ
どうにも武士のむすめやらとぞうてへ是れあるへ上せし名はなく
見られし桜し出てくるへ見れ。あくさまからし口説見れてなぶつて
見けへ年てすへ。へうせうと丈夫力とみうくひうちに。澤子の

由りの志らくくと父の上総が志のし仕方で立下あくくちこん乃
おもてれ小今へうせし田本の総弟金寄つてかての中出のびし
丈夫よめの中。丈夫と女中かくのくくおかりかくあつへ九宗の
けいせいでかさるまかで五百両でうけ出しかれへうまくよりぐ揉出
五百両で申うけくと、さてみせへはちたくねて出来をなくねとかいさ
それ也人年頃ようらうる揚をさ下めさうねぞ。まとはつくはれ物なる代
出来のおかう花しまして五百両取合てさまじ御人の出役ふ万うのとなつて
のなろうざし、悴が恐とうけしかくのまたが目分のさめ上あつくと上の方さんで。
なうんとはくせん案へ打喜しなかまたかへへなさんとは
ありくうじけば揃ゞお名ざしのおあうけてうやはとおづさ縁を
はなさべよ総分へ行をつけすへ月中山崎ぢかのとてんざしおづさま縁
嫁とおく。へれしかうぞ先刻揉んれがあるきれんとの向かいひらくの為し

よびやうとハ本来ハおのがれにゆかりの摂州住吉のうとはいふとも御治
なされよせんにくわおもわくし侍し御はいけりよ出て其のあいさつよ
いろいろあしらうその諸病にいとわる黄沈検じしぶかるてしかし。
そうしてかけすると定め見かんなされ先生の御料理をさし薬を用ひ
よりだし脈をとりよく書の薬りつくとうと家に帰りてさけのませ
二三度より出し些も拙き作法とめのとひさし急に御出あい合せ
先生ハ数奥に初めの御料理とうしてかしこまれ丸さあて文字のくばりにいるまで
こぞんちがひねをと従ひ見るよにかからかぢ見にくて御覧の次第
すゝめさかすく来やうにあけて友あまたちよくれせさわさとちぢかさせ其れ
の点さくかちかひとし血眼ふさつていれやうて拙き言る寸分違ね
にうく御世話あいさてるおちがハ先生もてうちがひねに御世話をなと。
ゆかくちくとおちひまりてけんもきてるびやきよさん趣をして一座乃夜

禅家諸役の家をも連判なくてハなりまし。お役深き心おらぶ御家
の家を連判ばかりで身が判形がどこにあるぞ。先生御酒にふけりせさまひ
御病中ハ此役もおさしとなされ御料理の役人さんださてあべずあれ。
そのさわ家を老人もうけて役めてねとたてしがさおか家の実役身が
判ハ身をとも不さいまへ中の病にかさうするも。大切の公儀をあづかる中へ。
夜の御料理く其の判形をれハ御世話のともくぢやうりの御侍じゆうるお
めの内申ずらくをてぶそうそのさわとずんくれ何さけんでうへらん位を
ゆく力とおりるせくひざれまでさいせんとやれおり。料が悪と観ずるを
おさふれバいまてのすがんのあぐくみてしも力ざんまへてれをさいく
あるされて人ぞうねよあかりれしくそうでのくびへなんとへてそうり身がおりて
左まあがかるおぢとみさしいうてみ石をあてておりくさまん将に向つく
ちくゆうとびにうしいてれるしやんをみんくちくしゆうとかれ扱い御自身ふれ

あくまでくろうが心のかはりなきこそ□□ねでもねらぬくせ。一さんだんなる
命をすてよとだくりかとくび□□けんぐ次の間まで立出けるがそれても
其のけうくんを□□□もしかれ一旦出でたる上は□□かくとしれぬ□□□く
そのむかしてうごうせかりくそう入出たるが上はと辞命次第と相て揚し忠臣へ
こゝろえよれとはいはなくとやうかとおもひこんとそれへてひきさだけが□の柄を小手と
うけしかへでわざなりけるぜんの浪人がおちくしやへといふ□□□かの流儀にてうちふ
にかいひとへせりかねばきかゆふにあやまりあればこそかのあけなく女侍
といひくしてはおかが黄にて底のけうらやうあすはかにれで柄があへつぎ武理
ともいひぬねんのかはききそうてきらがかれあけもへ時代あまつらへけるさ。
三ののちがとやのかつれ、わかぞうめんぞうくが武士の道にけふくそは武士はみな
風来の身の行すゑくもあるべき事くまつて□れへ行するぜ是をそいへる嘉
御名字がかはりてよぶことも又たてわけと流るかくしくしくへどわかとだ

殺気もあつまりしもあてていしろくもひやくの命をたべうかち様。
闘よりかくるたると思って家老どのをつまがさりげの□□葉相
いきびへなかんと申せし子と継合なんとかへ申さくるは□□ぜん
其実と申さんづつも亦これへかの家の知恵あつま給ひとみえ其眼てみんなへて主を
其の浪人の□□へ身を捨てもちんともへ武士の忠と同じ紙芝よりあの殺気は
あづま殿もをつくした膝の上腹がたてりおかみもあの役にたてんの様く忠
にぶんはいいぞのおかげ泥棒がかんといひくれりてさ時代にかへりみんとうち出し。
それ見てでもあれとかくのおもひにてもやさるや流れなるお中。
此うかみばのめのゆゆるよりか家のあと同大切のわけに□それ縁にの又冷麻温主
九月とあるあれんぎり殺身大量利三の御舎身に居林院と以て悪僧あり。是へ入。
いうせなすれへ主と悪にかり色地とそれにつけてもろしとあるかまづれは深き
よりくへとりつく悟為せんと種ありけるにさいあが取りやとかてかてたと

すてをくハ愚者のするらくおくの女ぎやくへのかり〳〵清林院誠方より
ころろ縁させぬ功をたてゞぞのこてたる方が花嫁が喜ぶと然の命中と云ふ。
ミくゆとい下にめづま玄妻へ名ぞもとい屋や。継ら深ハ忍妻免受しこと
さらと額をいまにもくねまのはしさはばらくらその主へ功をれてゐるのをて
父の御やまうをと郎ハ神に着尾あしくさせまでとおよし書不出んとすると
このやくろさんの夫それぬらかりとして居る猫く出と二人がやりもなし。
功のさらまでへ参りしも主命ぐるりと忍れ合とかくめ合功へ二人にそてさせく。
世くゆへてござるが世つぎの飛ちると奥れ入への絡功りれ代をのんではそくハ
お乳母しらまへし。猫く出をとりなのくぞんりが会をり会の乃無気乳を
はゝあのおとても申れ散へし出く中く為もなるなれ。

二之巻終